海軍ニュース：中国国産空母第 2 号の最新情報

漢和防務評論 20141102 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国国産空母は、現在大連と上海で 2 艘建造されています。但し上海の江南造船所で建造する空母は未だ設計図が完成していません。

この 2 艘の空母は設計思想が異なり、大連の方は遼寧のコピーに近く、上海の方は蒸気カタパルトを搭載するようです。

設計が遅れている理由として、KDR は、蒸気カタパルトとスキージャンプ台の両方を載せるか、ジャンプ台を撤去するかで論争があるからと推測しています。

KDR 上海ニュース：

中国造船工業界の権威筋は、**KDR** に対し、江南造船所が建造する最初の空母の基本的特徴は、通常動力であり核動力ではない、と述べた。このほか遼寧号及び 001A 号(北方造船重工が建造中の空母)に比べると、設計図が大きく異なり、搭載する蒸気カタパルトは開発最終段階にあるようだ。現在設計図は完成していない。言い換えれば、設計図全体が未完成である。船体動力等々が 001A とは異なるので、第 2 艘目の空母(江南造船所で建造中)は、1 艘目の空母 001A の完成を待たずに建造開始できる。現在第 1 艘目の 001A は、大連造船所の室内船台上で建造中であり、鋼板切断儀式は昨年末に終了している。

西側の学者の一部は、江南造船所で建造される空母は、ソ連の **ULIYANOVSK** 号に類似した核動力である、と述べている。またネット上に出現した番号 18 の空母模型は、スキージャンプ式甲板を採用せず、**J-15** 戦闘機が蒸気カタパルトで発進する絵が描かれている。

KDR が以前に報道した通り、中国は、1990 年代のウクライナの経済危機時に、確かに **ULIYANOVSK** 号の核動力技術を獲得しようとした。しかし、江南造船所で建造される空母は、権威筋からの情報によると通常動力である。中国海軍が採用している戦略は、” 一步一步進む ” 戦略である。したがって **KDR** の分析では、番号 18 の空母模型は、必ずしも江南造船所が建造している船体ではない。なぜならば設計図が未完成であるからだ。空母建造は高度の機密に属し、現在実物模型が展示されることはない。

次に、通常動力を採用したということは、電磁カタパルトの採用は不可能と言える。電磁カタパルトは大量の電力を消費する。したがって蒸気カタパルトを採用するであろう。

これは、ウクライナと中国軍事工業の協力の経緯を分析すれば分かることである。第一、ウクライナは確かに様々な部門で中国に対し 2 種類の動力案を提供したが、中国の要求に応じて核動力空母に関する技術情報を提供したことは無い。核動力空母建造の経験、技術及び設計図（英国は設計中）は、ウクライナ、米国、フランスだけが持っている。

第二、ウクライナは、出来上がったばかりの蒸気カタパルトを SAKI 州の NITKA に保有している。同様に中国人によって研究がなされた。この蒸気カタパルトはソ連空母 ULIYANOVSK に搭載する計画であった。当時はテスト中であった。その後ソ連は崩壊してしまった。このほか中国は、ブラジル空母の蒸気カタパルトを詳細に研究している。中国の工業体系全体を見ると、現在蒸気カタパルトを国産するに当たって技術的問題はない。

江南造船所における建造空母第一号の名称に関して、ある説は名称が 002 であるとする。官側の裏付けは取っていないが、完全にあり得る話である。動力系統が 001 や 001A とは異なるので、当然 001 の発展型ではない。したがって 2 種類の名称が考えられる。002 或いは 003 である。もう一つの観察目標は：蒸気カタパルトを採用したからには、14 度のスキージャンプ台が撤去されているかどうか？である。18 号空母模型ではジャンプ台はなかった。

中国側の関係者に質問した際、答は皆同じであった。未だ最終的な設計図は完成していない。すなわち最終的な設計図が完成するまでにはさらに時間がかかると言うことだ。考えられる遅延の理由は、技術部門であり、技術的問題が海軍内で最大の争点になっている可能性がある。類似した事例は、当時ソ連が設計した 3 艘目の空母 ULIYANOVSK 号（以下 U 艦と称す）である。U 艦は核動力で、蒸気カタパルトを採用したが、14 度のジャンプ台を残した。なぜこのような矛盾したことを行ったのか？ソ連工業体制の発展の脈絡を理解して得た結論は：矛盾しない、と言うことだ。

当時スキージャンプ台に反対した学派は：蒸気カタパルトがあるのに、ジャンプ台は何に使うのか？無駄に空間を占有することになる。スキージャンプ台上には航空機を係留できない、と主張した。

スキージャンプ台の残置を主張した学派は：ソ連工業にとって蒸気カタパルト技術は、初の経験である。ソ連工業体制の製品は信頼性が不足している。万一、カタパルトが故障した場合どうするのか？航空機は離陸できないのではないのか？ソ連は如何なる種類の武器も開発している。伝統的な武器も核兵器も生産し、同時代のものであっても、性能が同じであっても、2 種類以上の兵器で対応する体制にある。しかも競争原理を採用してはいない、と述べた。

最終的に後者が採用された。緊急時用にスキージャンプ台は残された。これが空母 ULIYANOVSK 号の外観が特殊である最大の理由である。

ソ連工業体制の病弊は、中国と同じである。後者は、ソ連から学んだ弟子である。もし **KDR** の判断が正しければ、現在、江南造船所内部、工場と海軍の間で、類似の大きな論争があり、その理由で設計図が完成しないのではないかと考える。その他の空母技術については基本的に問題は無く、すでに遼寧号を製造する過程ですべて経験した。

もし江南が **U** 艦の設計を採用するならば、甲板上に係留できる機数が少なくなることを意味する。しかも当時 **U** 艦の折中設計案は、艦の排水量を増し甲板を拡大することであった。結局核動力と言うことになった。もし江南空母が通常動力を採用するのであれば、遼寧号よりも大きくすることはできない。

しかも蒸気カタパルトとジャンプ台を同時に保有するのであれば、船体構造が複雑化し、重量増加することを意味する。これはソ連 **U** 艦建造当時の状況とは異なる。後者は核動力であった。この前提の下で、江南空母は、スキージャンプ台撤去の意見が増大する可能性が高い。

有利な一面は、江南空母が蒸気カタパルトを採用することによって、搭載する艦載機の種類が増える可能性があることだ。必ずしも **J-15** だけを主にする必要は無い。これはロシアですでに淘汰された前世代の艦載機である。江南空母＋蒸気カタパルトは、**J-15** 或いは、現在開発中の艦載機、例えば **J-31** ステルス機或いは更新したその他の機種が選択可能である。早期警戒機も搭載できる。早期警戒機を搭載すれば、大連空母に比べ、江南空母の戦闘力、遠距離航海能力が大幅に増加する。

3 艘目以降の中国国産空母は、江南造船所で建造される可能性が極めて高い。

以上